

2020 年度 教育・研究年報

目 次

教育・研究年報

- 一般教養・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 基礎看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- 成人看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
- 老年看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
- 母性看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
- 小児看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
- 精神看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
- 地域看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
- 在宅看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

外部資金獲得状況

- 外部資金獲得状況一覧・・・・・・・・・・・・・・・・ 30

2020年度 一般教養領域活動報告

1. 領域構成

清水哲郎（教授）、砂山稔（教授）、相澤出（講師）、大井慈郎（特任講師）

2. 一般教養領域における教育に関する内容と評価

2020年度、一般教養領域教員が担当した講義等に関する教育内容および評価については以下のとおりである。

2020年度は、清水教授は「探求の基礎」（1学年）、「看護倫理」（2学年、濱中教授、石井講師と共同）、「人間の生と死」（2学年）、「エンドオブライフケア論」（3学年、濱中教授、大越教授、石井講師と共同）、「臨床倫理」（4学年、濱中教授と共同）を担当した。これら5科目の清水担当部分について共通のテキスト試行版『看護学生のための哲学・倫理学・死生学 2020年試行版』を作成し、これを使った授業を実施してテキストの有効性を調べたが、学生にとってはこのようなテキストがあることは学修のために有効であることは確かである。なお、改善の余地が大きく次年度に向けて改訂をしている。

相澤講師は、講義に関しては今年度、1年生を対象とした基礎科目「地域の文化」（前期、必修）「人間と文化」（後期、必修）、専門基礎科目「ボランティア論」（後期、選択）、2年生を対象とした基礎科目「家族という社会」（前期、必修）、専門基礎科目「チーム医療論」（後期、必修）、3年生を対象とした基礎科目「社会と福祉」（前期、必修）を担当した。さらに、福島教授が科目責任者である統合科目「保健医療福祉連携論」でも分担者として講義を行った。一般教養という位置づけではあるものの、各科目の内容は、看護学のさまざまな論点と直結するものばかりである。そのため、講義担当者としては、これらの科目も準専門科目として意識し、他の看護学の講義との関連を学生に意識づけしつつ講義を実施した。さらに、1年生を対象とした基礎ゼミナール（通年、必修）と4年生を対象とした卒業研究ゼミナール（通年、必修）を担当した。基礎ゼミナールにおいては、大学において初めてゼミナールでの教育を経験する学生たちに対して、基本的な文献の輪読、レポートの作成と報告を課題としながら、ゼミナールの運営を行った。基礎ゼミナールでは基本的に全員が、テキストのいずれかの部分を担当し、報告する形式をとった。これによって、大学における基礎学力の向上を図り、その成果が期末には見出された。なお基礎ゼミナールについては、前期に一斉講義の形式で全員を対象として、大学での学び方についても講義を行っている。卒業研究ゼミナールについては、3人の学生の卒業研究の指導を行った。文献の読解、先行研究の検討、研究計画書の作成指導等を行い、学生各人の問題関心にそった研究実践を支援し、学生の看護研究の能力開発を行った。

大井特任講師は「情報処理」（1年）、「調査と統計」（3年）、「看護研究方法論」（3年）を担当した。「情報処理」は、大学生として必要な情報リテラシーの理解やアカデミックスキルなどを学習するものである。本年度は論文の剽窃などへの注意喚起のため、引用・文

献リストの作成法について昨年度以上に時間を割いた。今後はビデオチャットの活用に関する内容を増加させたい。「調査と統計」は、保健医療の場や看護研究において必要となる統計学の基礎知識を学び、統計資料を理解し調査・分析を遂行する力を身につけるものである。学生が各種調査方法を実際に体験することに注力した授業展開を図った。「看護研究方法論」は、看護学発展の基礎となる研究の意義を理解するものであり、量的研究（全5回）を担当した。「調査と統計」と同じ教員が担当することにより、2つの授業を関連させながら展開することができた。

3. 一般教養領域における研究に関する内容と評価

2020年度、一般教養領域教員の研究に関する内容と評価については以下のとおりである。

2020年度は、清水教授は科学研究費助成事業 基盤研究(A)（課題番号 18H03572）3年目の研究活動を行った。

- ・ 前年度に続けて、臨床倫理の検討システムおよび本人・家族の意思決定支援の研究開発を行い、ことに倫理的な意味を持つ行動を〔状況に向かう倫理的姿勢+状況把握⇒選択・行動〕という構造に分析することに基づくジレンマの検討法を充実させた。
- ・ 研究成果を本学の教育カリキュラムに活かす方途の研究開発（倫理関係授業の総合的テキストの改訂と第2版刊行）を続けた。
- ・ 研究成果の臨床現場への還元として、臨床倫理セミナー（オンライン）の開催、医療・看護・介護関係諸団体の臨床倫理研修・ACP相談員養成研修（オンライン）、透析関係シンポジウム（オンライン）等にて講演等を行った。また、看護管理者の視点で臨床現場に必要な倫理について概説を作り、加えて研究協力者である各地の看護部長の倫理に関する活動をまとめた書籍を作成した。

砂山教授は、中唐の文人元稹と道教の関係を考察した論文を完成、日本道教学会からの依頼である増尾伸一郎氏著の『道教と中国撰述仏典』の書評を含む研究ノートとともに学会へ提出済である。白居易と道教に関する二論文は、順調に進捗。これらの論文と従来の諸論文等を整理・収録した研究書『連昌と華清』（仮題）を構想しており、近年中の出版を計画している。

また、岩手大学人文社会科学部宮沢賢治いわて学センターから依頼のあった構大樹氏著『宮沢賢治はなぜ教科書に掲載され続けるのか』の書評も完成し、同センターに提出済であり、『賢治学+』に掲載される予定である。

相澤講師は、以前から継続している地域包括ケア（具体的には在宅療養支援診療所、訪問看護ステーション、地域包括支援センター、特別養護老人ホームなど介護施設）の現場レベルでの調査研究を継続して推進した。今年度、主たるフィールドとなったのは宮城県登米市、秋田県能代市である。登米市のフィールドワークの成果から、在宅療養支援診療所と特別養護老人ホームのスタッフと連携し、二つの学会報告を行った。ただし、今年度

は covid19 の感染の拡大があり、フィールドでの参与観察など、患者や介護サービス利用者にも接近するタイプの調査を控えなければならなかった。さらに感染拡大期には、医療・福祉の専門職への聞き取りも控えなければならず、調査の遂行にあたり多くの制限が生じた一年であった。

調査以上に力を入れたのは、これまでの調査結果の分析と論文化であった。これについては、国立民族学博物館研究プロジェクト（共同研究）「現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究」（代表者：浮ヶ谷幸代、館外研究員として参加）の成果論文集に寄稿する論文、日本社会学会の『社会学評論』の特集論文（依頼有）を執筆し、刊行が待たれる。この他、全国社会福祉協議会が刊行する『ふれあいケア』からの依頼原稿を執筆した。以上の研究は、科研「臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組込み」（基盤研究（A）、課題番号 18H03572、代表者：清水哲郎。研究分担者として参加）の一環である。このほかに、科研「東北地方における女子ミッション教育の戦後史」（基盤研究（C）、課題番号 17K04570、研究代表者：片瀬一男）の研究協力者として、近代日本における女子ミッション教育の歴史社会学的研究の遂行に継続して関与している。

さらに山形県立保健医療大学看護学部の遠藤和子教授をリーダーとする共同研究に加わり、看護師と介護職を対象とした腹膜透析に関する教育プログラム開発の研究に従事した。

大井特任講師は科学研究費助成事業等の競争的資金を得、また地方公共団体との協働事業参加等により、次のような研究活動を行った。

- ・科学研究費助成事業若手研究（B）（課題番号 17K13838 代表者：大井慈郎）による、インドネシアジャカルタにおける現地調査。本年はそのデータ分析を実施し、結果の一部を招待論文として公表した。
- ・介護予防事業研究（東北大学教員等と協働）にて、宮城県富谷市保健福祉部長寿福祉課と連携し、各地域にて実施されている高齢者サロンへの訪問調査を実施。調査結果の一部を査読論文として公表した。
- ・宮城県富谷市総務部市民協働課と連携し、2018 年度から実施している町内会状況調査の報告書を作成した。その上で新たに、新型コロナ感染拡大の影響に関する町内会アンケートを現在実施中である。
- ・盛岡市内にて、町内会の閉じこもり防止活動（主に高齢者対象）に年間を通じた参与観察を実施。調査結果の一部を論文化し、現在査読中である。
- ・盛岡市内の一連合町内会に所属する各町内会・自治会に対し、新型コロナ感染拡大の影響に関する町内会アンケートを現在実施中である。

以下論文等

【著書】

- 1) 宮下光令編：『緩和ケア・がん看護 臨床評価ツール大全』（青海社），共著，2020. 全 ix +395ps、清水哲郎 担当執筆部分：Ⅷ 6「臨床倫理（：4 分割法，臨床倫理検討シート）」，単著，p376～384.
- 2) 清水哲郎 編著：『看護管理者のための臨床倫理・組織倫理入門』（ナーシング・ビジネス，春季増刊号、メディカ出版），共著，2021. 全 168ps，清水哲郎 担当執筆部分：第 2 章「看護管理者のための倫理」，p30～89.

【論文】

- 1) 相澤出：住み慣れた地元での暮らしの継続と看取りを実現するために—二ツ井ふくし会の「ホームカミング」，ふれあいケア 27(2)，2021. p28-33.（招待）
- 2) 相澤出：地域医療の担い手が捉える過疎地域の家族と介護の変化—宮城県登米市を事例として，社会学評論 71(4)，2021.（印刷中，招待）
- 3) 大井慈郎：東南アジア首都圏郊外の拡大における工場労働者の視座—ジャカルタ郊外の事例より，日本都市社会学会年報 38，2020. 82-99
- 4) 大井慈郎：高齢者サロンにおける参加と住民主体の問題—宮城県 X 市 A サロンを事例として，日本都市学会年報 54，2021. 印刷中

【学会発表】

- 1) 清水哲郎：シンポジスト講演（招待）「本人の人生・価値観と医学的妥当性・適切性の中で」、シンポジウム「人生の最終段階と透析療法—緩和ケアとACPの役割」，東京大学大学院人文社会系研究科上廣死生学・応用倫理講座，日本老年医学会、AMED柏原班「高齢腎不全患者に対する腎代替療法の開始／見合わせの意思決定プロセスと最適な緩和医療・ケアの構築」共同主催，2021. 3. 14（オンライン開催）
- 2) 佐々木直英・宇田川佳浩・相澤出・齊藤奈津美：ポスター発表（一般）「特別養護老人ホームの配置医はプライマリ ケア医の出番です！」プライマリ・ケア連合学会第11回大会，2020年8月（オンライン開催）
- 3) 佐々木直英・宇田川佳浩・相澤出・齊藤奈津美：ポスター発表（一般）「特別養護老人ホームと在宅療養支援診療所の連携による施設看取りの推進」プライマリ・ケア連合学会第11回大会，2020年8月（オンライン開催）
- 4) 大井慈郎，木村雅史：地域づくりによる介護予防事業と社会参加の現状と課題：宮城県X市の高齢者サロン事例研究より，第67回日本都市学会大会，2020. 11. 1 オンライン

- 5) 大井慈郎：「地域づくり」と「閉じこもり防止」の隙間の検討：岩手県X市Y地区における「つながりづくり」をしない高齢者支援を事例に，第67回東北都市学会大会，2021. 3. 22-3. 28 オンライン（オンデマンド形式）

以上

2020年度 基礎看護学領域活動報告

1. 領域構成

菊池和子（教授）、長谷川幹子（准教授 7月就任）、竹本由香里（准教授 6月退任）、作間弘美（助教）、成田真理子（助教）、原田圭子（助教）、武田恵梨子（助手）

2. 基礎看護学領域における教育に関する内容と評価

開学4年目となり、主に1年生及び2年生の科目を担当し、4年生の科目の一部を担当した。看護学概論（菊池教授）、基礎看護援助論（菊池教授、竹本准教授）、看護理論（菊池教授）、ヘルスアセスメント、生活援助技術論、療養援助技術論、早期体験実習、生活援助実習、総合実習は、領域内教員が分担・共同して講義・演習、実習を担当した。2年生前期の科目である看護過程論は領域内教員と他領域教員と共に担当した。通年科目としての基礎ゼミナールは、菊池教授が担当した。4年生の卒業研究ゼミナールは領域内の教授、准教授、助教が分担・共同して指導した。看護管理論を竹本准教授が担当し、看護教育論を菊池教授が担当した。

基礎看護学で教授する科目は、看護学の基盤としての役割を担うため、学生のレディネスを把握し、各科目の教授内容について昨年度の授業評価を踏まえて教授した。

ヘルスアセスメントや療養援助技術論の授業では、“SCENARIO”を用いたシミュレーション教育を取り入れ、臨地に近い状況からのアセスメント能力の向上を図った。

生活援助技術論は、新型コロナウイルス感染症患者の増加傾向が確認されたため、12月より技術演習を全て前倒しで実施し、反転授業の方略を用いて授業を実施した。これまでは、学生が講義の空き時間に実習室にて自由に看護技術の自己練習を行っていたが、新型コロナウイルス感染症対策のため、密にならないように配慮しながら練習回数を確保できるよう、20人を上限としclassroomを活用した予約制の自己練習を実施した。1か月に一人平均7回程度、最低でも5回の練習の機会を確保できたが、回数は限られるため、予約時間には必ず教員が実習室に待機し、指導に当たりフォローした。

早期体験実習および生活援助実習の準備・調整・実施・評価については、基礎看護学の教員が全員で担当した。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大により実習先から実習生受け入れ中止の連絡があり、臨地での実習が困難となったため、学内代替実習として、実習目的を達成できるよう教育方法を検討し、実施した。

<早期体験実習（1年生、1単位）>

学内代替実習として、実習目標に沿って、調べ学習、看護職が働く場と看護職の役割を学ぶためのオープンカフェ、チームを構成する専門性の異なる職種を学ぶための動画を視聴し、それぞれの職種について検討する学習、看護の対象者について学ぶための事例検討による学習、臨地の看護職種（保健師、助産師、病棟看護師、訪問看護師）を理解するための教員の臨地での経験談から学ぶ学習で構成し実施した。学生および担当教員の評価はほとんどがA評価であり、実習目標が達成できる実習の組み立てであった。

<生活援助実習（1年生、2単位）>

学内代替実習として、初日は病院の看護部長より看護職の役割、実習の心構えについて学び、実習を効果的に進めるためのカンファレンスの進め方、実習中の安全についての講義、2日目はナイチンゲールの看護のDVDを鑑賞し看護援助の基本について再確認し、病院の実習指導者より実習の実際についての講義を受けて、3日目からは1学年の半数を交代で3日間ずつ、受け持ち患者実習、学内代替基礎実習を行った。

受け持ち患者実習では、事例を提示し情報の整理とアセスメントの統合、患者の援助のポイント・その日の実習計画について検討する基本的展開から始め、申し送り（目標・実習計画の発表）から担当看護師との実習計画調整、実施、評価、計画の修正、カンファレンスという臨地実習の1日の実習開始から終了までに近い形でのスケジュールで構成し、目的に沿って実施した。3日目のカンファレンスでは、臨地実習で行う最終カンファレンスと同様の形態をとり、4箇所の病院の実習指導者にZoomにて参加いただき、学生に対し助言と質問への回答をいただいた。

学内代替基礎実習では、患者の療養環境を知り、環境調整の目的や必要性を学ぶ実習、コミュニケーションや観察を通して対象者を理解するための情報収集について学ぶ実習、模擬患者の体験から看護学生としての責任ある行動について学ぶ実習の組み立てで実施しそれぞれの目標を達成できた。

実習指導については、基礎看護学領域教員と、申請内容をふまえ学内の教員が担当した。

これまでの課題として、1年時の前期演習科目のヘルスアセスメントが形態機能学と並行して教授するため形態機能学の理解がほとんど進んでいない段階で、ヘルスアセスメントにおけるフィジカルアセスメントの理解に時間を要することが挙げられた。今年度も昨年度と同様に前期後半からヘルスアセスメントを開講し、事前課題として解剖生理学の課題を課し、学生の学習効果をあげるようし学生の理解度があがっている。2022年開始の新カリキュラムでは、開講時期を形態機能学終了後の1年後期に変更する予定である。

実習に関しては、来年度は、新型コロナウイルス感染拡大が鎮静化し、臨地での実習が可能となるように期待したい。

3. 基礎看護領域における研究に関する内容と評価

開学時から取り組んでいる学内プロジェクト研究に所属している教員は、共同の研究活動を行い、その成果を看護系学会学術集会で発表した。また、論文としてまとめ学会誌に掲載された。それ以降の調査について、今後、学会発表及び論文としてまとめ公表する予定である。

その他、個人研究や他施設教員との共同研究で取り組んだ研究についても看護系学会学術集会で発表した。また、論文としてまとめ学会誌に掲載された。

基礎看護学領域は他領域に比較して、開学時から授業や実習に関わる比率が高く、教育に時間を多く要するなかでそれぞれが研究活動を行った。今後は今年度取り組んだ研究を含め、基礎看護学領域としての共同研究を推進すること、それぞれの教員がこれまでの研究成果を論文としてまとめ公表していきたい。

以下論文等

【著書】

- 1) 長谷川幹子：抑うつ状態（うつ病）患者の事例，平澤久一，古谷昭雄監修：ユーモア看護 - 癒しと和み - ，82-85，金芳堂，2020.

【論文】

- 1) 原田圭子，村松真澄：積雪寒冷地に住む高齢者の外出目的別楽しみの程度と外出に対する自己効力感との関係，老年看護学，(25) 1，123-131，2020.
- 2) 長谷川幹子：病により苦悩する神経難病患者と関わる看護師のありようの探求 - 注食中止の意思を表明した患者と関わった看護師の体験に着目して - ，人体科学，29(1)，11-21，2020.
- 3) 長谷川幹子，安福真弓，重年清香，阿部真幸，板東正己，道廣睦子：看護系大学4年生の死生観に影響する要因に関する研究，インターナショナル Nursing Care Research，19(1)，137-145，2020.
- 4) 石井あゆみ，岩佐美香，長谷川幹子，藤原尚子，武内美恵，池添知夏，岡井純子，阿曾多由子：成人看護学実習における効果的な実習指導行動の検討-ECTBを用いた学生評価と看護師自己評価の比較-，千里金蘭大学紀要，16，153-158，2020.
- 5) 菊池和子：A 県内のがん看護専門看護師の役割開発，岩手看護学会誌，14（1），52-61. 2020.
- 6) 遠藤芳子，竹本由香里，佐藤つかさ，青柳美樹，大谷良子，作間弘美，江守陽子：岩手県内で就業している看護職者の地元就職した理由の調査-看護学生を地元就職に繋げるために-，北日本看護学会誌，23（1），1-8，2020.
- 7) 大谷良子，作間弘美，江守陽子，遠藤芳子，青柳美樹，佐藤つかさ，竹本由香里：岩手県内の医療機関で働く20歳代看護職者の職業的アイデンティティと地元志向に関する調査，北日本看護学会誌，23（2），27-36，2021.

【学会発表】

- 1) 成田真理子，作間弘美，武田恵梨子：ブリーフィングに焦点を当てたシミュレーション教育の文献検討，第1回日本看護シミュレーションラーニング学会学術集会，2020，Web開催.
- 2) 成田真理子，佐藤恵，石井真紀子，添田咲美，菊池和子，濱中喜代：看護学生の3年間の「ケア・スピリット」の認識の変化-量的データの分析から-，日本看護学教育学会第30回学術集会，2020，Web開催.
- 3) 添田咲美，石井真紀子，菊池和子，成田真理子，佐藤恵，濱中喜代：看護学部2年生の「ケア・スピリット」の認識-質的データの分析から-，日本看護学教育学会第30回学術集会，2020，Web開催.
- 4) 作間弘美，成田真理子，竹本由香里，武田恵梨子：自己調整学習過程に着目した学生の生活援助技術論履修前後の比較，日本看護研究学会第46回学術集会，2020，Web開催.
- 5) 作間弘美，大谷良子，江守陽子，遠藤芳子，青柳美樹，佐藤つかさ，竹本由香里：

- 看護学生がロールモデルを持つ効果に関する調査—職業的アイデンティティ・地元志向・実習達成感との関連—, 第 23 回北日本看護学会学術集会, 2020, Web 開催.
- 6) 青柳美樹, 大谷良子, 作間弘美, 江守陽子, 遠藤芳子: 看護学生の職業的アイデンティティと地元志向の 3 年間の変化, 第 23 回北日本看護学会学術集会, 2020, Web 開催.
- 7) 長谷川幹子, 小林道太郎, 赤澤千春: 看護師たちが捉えた注入食中止の意思を表明した ALS 患者の苦悩, 第 46 回日本看護研究学会学術集会, 2020 年 9~11 月, Web 開催.
- 8) 長谷川幹子, 小林道太郎, 赤澤千春: DNR の意思表示をしていた ALS 患者の急変時に対応した看護師の経験, 第 46 回日本看護研究学会学術集会, 2020 年 2020 年 9~11 月, Web 開催.

以上

2020年度 成人看護学領域活動報告

1. 領域構成

土田幸子（准教授）、石井真紀子（講師）、吉岡智大（助教）、添田咲美（助手）、佐藤大介（助手）

2. 成人看護学領域における教育に関する内容と評価

2020年度に領域の教員が担当した科目は、成人看護学概論、成人看護援助論、生活習慣看護論、慢性期看護技術論、急性期看護技術論、がん看護論、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ、卒業研究ゼミナール、総合実習、早期体験実習、生活援助実習、療養援助実習Ⅰ・Ⅱ、基礎ゼミナール、看護倫理、人間の生涯発達、エンドオブライフケア論、災害看護論、救急看護論の20科目であった。

1) 専門科目について

(1) 講義・演習について

4年次は領域全員で卒業研究ゼミナール（11名）、総合実習（12名）を担当した。卒業研究ゼミナールでは、終末期看護・手術患者への看護、新人看護師教育等のテーマで研究計画書を作成し発表会を開催し、他領域の教員からのアドバイスを受けた。

「総合実習」は各自の目標をもとに終末期看護、難病患者の看護、周術期看護に分かれ、各病院の日課等を参考に実習方法を検討して実施した。学生の準備状況には差があり、実施中も実習に臨む姿勢を高く評価を受けた学生がいた半面、消極的で日々指導を要する学生もいた。さらに、「災害看護論」と選択科目「救急看護論」をオムニバス形式で土田が担当した。災害看護論では、被災地視察の結果をもとに復興期の看護活動のあり方について教授した。救急看護論では、急変時の看護に重点を置き、様々な患者の状態を提示し、グループワークでその状態や訴えからアセスメントし、看護の優先度を考えさせた。

3年次は、前期に「慢性期看護技術論」、「がん看護論」、後期に「急性期看護技術論」を担当し、それぞれの看護の特徴に焦点を当て展開した。特に、3年次の臨地実習にスムーズに連動できるよう臨床場面を想定して学内演習を実施した。1つの場面の成り行きまでを考慮してアセスメントができるよう計画し、生活援助技術を組み入れ基本技術の復習と健康障害のある対象の理解が深められるよう配慮した。後期には「エンドオブライフケア論」をオムニバス形式で石井が担当し、人間の性を全うするための援助について教授した。

2年前期の成人看護援助論では、健康障害を有する対象への援助技術の習得に焦点を当て、成人期に多くみられる疾患と、主な検査と治療を教授した。2年後期の生活習慣看護論では、生活習慣と疾病の関連を理解し、成人期における人々の疾病予防と生

活習慣の改善の重要性について考えることができていた。また、糖尿病で教育入院した紙上事例を用いた看護過程を展開したが、今年度は臨地実習での受持ち患者への看護過程の展開ができなかったためか、看護過程の構成要素の理解が不十分な学生もあり、今後も継続して指導していく必要を感じている。演習では、紙上事例に対するフットアセスメント、自己血糖測定、インスリン自己注射を各自で作成した手順をもとに実施した。インスリン自己注射手順の作成では動画を視聴することや、手順作成に必要な要素を明記し、演習実施全3週間に提出時期を設定し、根拠が不明確な学生に対し個別指導を行った。当日使用する器具については初めて触れる学生が多く、実際の場面では器具の取り扱いに時間を要した。フットアセスメントでは、既修のフィジカルアセスメントの復習とタッチテストを行い、末梢フットケアの必要性を再認識することができた。

今年度の1年後期の「成人看護学概論」では、密を避けるため予定していたグループワークから個人ワークに切り替え、日常生活習慣や職業等に関連する成人期の健康障害について各自が関心を持つ疾患について学習しレポートにまとめさせた。そのレポートをもとに授業で成人期に多い疾患の特徴と看護を展開した。その結果、疾患を理解するための方策が身につき、生活や生活習慣と疾病の関連の理解につながられた。

「看護倫理」を石井が担当し、倫理を学ぶ意義や守秘義務、看護専門職の職業倫理などについて教授した。また、倫理的意思決定の事例検討を展開し、個人学習やグループワークを支援し、発表の機会を設け成果を共有することで学修を深めた。

(2) 実習科目について

今年度担当したのは、早期体験実習・生活援助実習・療養援助実習Ⅰ・Ⅱ、成人看護学実習Ⅱとであった。COVID-19感染症対策のため代替学内実習となったのは、

1年生の早期体験実習では、石井・添田・佐藤が担当し、生活援助実習は土田・佐藤が担当した。いずれの実習も科目責任領域（基礎看護学）で代替案が検討され、実施した。

2年生の療養援助実習は、COVID-19感染対策として実習受け入れ中止となった施設があったことから学内で代替実習を実施した。科目責任領域として代替案を準備し運営した。DVD事例「脳梗塞患者」をもとに看護過程を展開した。この実習では、看護過程のプロセスを踏むことを目標としているが、今回は実施・評価ができないことから、アセスメントの段階に重点をおいた。各看護過程の段階を個人学習後にグループワークで確認するように展開した。今回の事例展開では、担当する教員全員に領域で作成した事例の看護過程を配布し、指導の統一を図った。今回の実習では、看護過程のアセスメントの段階（収集した情報の解釈、全体像と看護問題の明確化）に重点を置き、1つの看護問題に対して看護計画の立案までの一連のプロセスを踏むこととした。しかし、実際の患者ではないため、脳梗塞という疾患を想像できず記録にもなかなか反映してこない部分があった。看護過程の各要素の理解も不足している学生もあり、指導を要した。また、毎日のカンファレンスでの発言が乏しく学びを共有するこ

とが難しいグループもあった。さらに、学内であったことから学習態度の面で指導を要する学生もいた。学習環境として体育館をメインとしたが、冷房設備がなく扇風機のみでの対応で学生からの苦情もあった。

3年生には前期「成人看護学実習Ⅰ」、後期「成人看護学実習Ⅱ」を領域内全教員で担当した。成人看護学実習Ⅰは全学生が臨地での実習が実施できた。これまでの臨地実習よりも看護度の高い患者を受持ち、看護の基本技術の向上と個別性のある看護の実践に重点をおいた。成人看護学実習Ⅱではコロナ禍であったが27名が臨地実習を経験できた。臨地実習では可能な限り周術期や急性期にある患者を受けもち、変化に対応した看護の実践をめざして展開した。ほとんどの学生が積極性を発揮し、受持ち患者と良好な関係を築き、個別性のある看護を展開していた。しかし、発熱した学生が2名おり COVID-19 感染症対策として公欠として対応した。代替として実施した学内実習では、実習目的を「紙上事例の生活指導や就床患者の生活援助、疾患や病態に応じた周術期看護の基本の習得を通して、健康障害のある成人期の対象に必要な看護の基礎的能力を養う」とした。学内実習では、臨地で体験する緊張感や責任感に欠け、前期の実習での課題達成に向けた取り組みは行えなかったものの、学生は与えられた課題に対して積極的に取り組み、演習を取り入れたことで看護技術の見直しができていた。C 評価を受けた学生2名は、グループワークに非協力的であったが自己評価は高く乖離していた。

4年生の総合実習は12名を担当し、終末期看護・慢性期看護・周術期看護それぞれ各自のテーマに沿って実習病院を決定した。終末期看護では緩和ケア病棟で実施し、病院側から提示されたスケジュールをもとに週間予定をたて、1週目は受持ち患者とじっくり向き合い個別性のある看護を考え、2週目は同室者への看護も考えられるようになっていた。周術期看護では、規模の異なる3病院で実施し、それぞれの病院の役割機能を学ぶこともできた。慢性期看護においては、積極的に基本技術の確実な修得に向けた取り組みをし、病棟スタッフからもとても良い評価を得た学生がいた半面、実習期間中を通して事前学習が不足し主体的な実習姿勢の見られず指導を要した学生もいた。

2) 基礎科目について

今年度は、基礎ゼミナールに土田がグループを担当し前期は外部講師により文章の添削などがあり文章表現力の向上が図られた。後期には、グループでテーマを決め、達成目標を設定し、次回までの目標を決め積極的に取り組んでいた。グループワークでは文献検索とその活用、グループ討議のあり方を学び、レポート作成、発表などを通して学生が主体的に学ぶための支援を行った。

石井が「人間の生涯発達」を担当した。成人期の発達の特徴と関連する理論について概説することで、学生にとって成人看護学概論の学修へと連動できていたと考える。

以下論文等

【学会発表】

- 1) 添田咲美，石井真紀子，菊池和子，成田真理子，佐藤恵，濱中喜代：看護学部2年生の「ケア・スピリット」の認識—質的データの分析から—，一般社団法人 日本看護学教育学会第30回学術集会（web開催），2020.
- 2) 成田真理子，佐藤恵，石井真紀子、添田咲美、菊池和子、濱中喜代，：看護学生の3年間の「ケア・スピリット」の認識の変化—量的データの分析から—，一般社団法人 日本看護学教育学会第30回学術集会（web開催），2020.
- 3) 淡路京子、五十嵐岳、中澤直人、若月聖孝、村松憲浩、土田幸子、長田尚彦、信岡祐彦：画像解析ソフトにて定量化した肝腎コントラストと血清マーカーの関連性の検討、第67回日本臨床検査医学会学術集会、令和2年11月

以上

2020年度 老年看護学領域活動報告

I. 領域構成

勝野とわ子（教授）、木内千晶（准教授）、齋藤史枝（助教）、金谷優輝（助手）

II. 老年看護学領域における教育に関する内容と評価

1. 老年看護学領域科目

「老年看護学概論」は、1年生の後期に開講し、勝野教授が授業を担当した。本科目では、学生の高齢者観・倫理観を深化させるとともに加齢に関連する諸概念と理論を教授した。また、高齢者を身体的・心理的・社会的側面から総合的に理解し、高齢者の健康レベルに合わせた質の高い看護を提供するための基礎知識を教授するとともに、対象者の成長と発達のプロセス、人口統計および社会構造の変化、災害時のニーズ、高齢者への保健・医療・福祉サービスの現状と課題を教授し、老年看護実践における専門的な看護者の役割と機能を概観した。授業内容の工夫点として、心理的な介入方法としてのレミニッセンスプロジェクトを課し、学生の高齢者と看護に対する興味を育んだ。学生の取り組みの姿勢および達成度は高かった。

「老年看護援助論」は、2年前期に開講し、勝野教授、木内准教授が授業を担当した。ヘルスプロモーションの活動プランを演習に取り入れる工夫を行い、齋藤助教、金谷助手もこの演習指導に加わった。この科目は、高齢者の生活を支える諸制度および社会資源、ヘルスプロモーションについて理解し、健康生活を支援する基礎的知識を修得する、また、認知症などについて理解を深め高齢者と介護家族に対する看護方法について基礎的能力を修得することを目的とした。学生の取り組みの姿勢および達成度も良好であった。

「老年看護技術論」は、2年後期に開講した演習を含んだ科目で、勝野教授、木内准教授、齋藤助教、金谷助手が担当した。高齢者の残存機能を活かした生活援助技術、高齢者に対するヘルスアセスメント技術について、感染管理を徹底し密を避けながら、技術演習を通して実践に即した方法が修得できるよう物品を整備し授業展開の工夫を行った。

「老年看護学実習」は3年前期に行われた。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の状況から学内での実習とした。学内実習への変更に伴い、ゲストスピーカーの依頼や施設見学等の打ち合わせ、看護展開事例の事前準備を行った。さらに、学生が実習前にヘルスアセスメントや基礎看護技術の復習を行える機会を提供した。また、個々の学生の能力差に配慮し最適な環境下で実習できるように調整した。実習中は勝野教授が、スムーズに実習が進行するよう工夫した。

2. 看護専門科目、統合科目、その他の臨地実習

「看護研究方法論」は3年後期に開講し、勝野教授と大井講師が担当した。看護学における科学的研究の意義と専門職としての役割、研究のプロセス、質的・量的研究デザイン、データ収集法と分析方法、科学的論文のクリテイクについて演習と講義を用いて教

授した。学生の取り組みの姿勢もよく、学生の達成度は高かった。

「看護過程論」「人間の生涯発達」は、1年の科目で木内准教授が担当した。「看護過程論」は関連図、看護問題の統合、全体像の描写、看護目標と計画の立案、実施、評価についての講義を担当した。授業の工夫としては、複数の担当教員と授業前に打合せを行い、具体的な事例展開ができる内容となるようにした。「人間の生涯発達」は2コマを担当し老年期の発達理論、発達課題について講義した。老年期の発達における身体的、精神的、社会的特徴について諸理論を交えて教授し、生活援助実習で多くの学生が受け持つ高齢患者の理解につながる内容とした。

「救急看護論」は4年前期の選択科目で木内准教授が担当した。担当教員と事前に打ち合わせ、救急看護の総論および各論についての講義を担当した。

「療養援助実習Ⅱ」は2年の後期に行われた実習である。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の状況から学内での実習とした。実習責任領域として、勝野教授、木内准教授、齋藤助教、金谷助手の協力体制のもと学内実習を行った。さらに、担当教員と調整し学生が実習前にヘルスアセスメントや基礎看護技術の復習を行える機会を整備した。学内実習では、フィジカルアセスメントと立案した看護計画を演習方式で実施し、看護過程の評価・修正まで行えるようプログラムし、個々の学生の能力に配慮し最適な環境下で実習できるように調整した。また、実習中は勝野教授が統括としてスムーズに実習が進行するよう工夫した。

1年の「早期体験実習」および「生活援助実習」、2年前期の「療養援助実習Ⅰ」を木内准教授と齋藤助教、金谷助手が担当した。それぞれ学内実習を行い、学生が実習目的を達成し学びが得られるよう支援した。

3. 老年看護学領域における研究に関する内容と評価

研究費の獲得については、勝野教授が研究代表者として科研基盤研究(C)を獲得し、研究分担者として携わっている科研基盤研究(C)とともに、長年取り組んでいる若年認知症家族介護者に関する研究を継続した。さらに、急性期病棟における認知障害高齢者に対するパーソン・センタード・ケアをめざした看護実践に関する研究成果を論文発表した。さらに、若年認知症家族配偶者に関する研究1件、寒冷地域高齢者を対象とした2年間のパイロットスタディ2件、老年看護学実習におけるヘルスアセスメント教育の効果2件について日本看護科学学会学術集会で発表を行った。木内准教授は、研究代表者として若手研究の3年目の研究活動を行った。その研究成果を日本看護科学学会学術集会で発表し、学術誌に論文発表した。さらに看護師のバーンアウトに影響する要因に関する研究について、*Nursing Open* に論文発表した。その他、寒冷地域高齢者を対象とした2年間のパイロットスタディ2件、老年看護学実習におけるヘルスアセスメント教育の効果2件について日本看護科学学会で発表を行った。齋藤助教は、老年看護学実習におけるヘルスアセスメント教育の効果2件について日本看護科学学会で発表を行った。金谷助手は、寒冷地域高齢者を対象とした2年間のパイロットスタディ2件、老年看護学実習におけるヘルスアセスメ

ント教育の効果 2 件について日本看護科学学会で発表を行った。

今後、さらなる研究活動の推進を図る予定である。

以下論文等

【論文】

- 1) 前田優貴乃、勝野とわ子:急性期病棟における認知障害高齢者に対するパーソン・センタード・ケアをめざした看護実践と関連する要因, 老年看護学, 25(2), 71-79, 2021.
- 2) 木内千晶、鈴木英子、高山裕子:療養病床に勤務する看護職における管理職と非管理職のワーク・エンゲイジメント・プロセスモデル, 日本看護科学会誌, 40, 502-510, 2020.
- 3) Eiko Suzuki, Yuko Takayama, Chiaki Kinouchi, Chihiro Asakura, Hirotooshi Tatsuno, Takae Machida, Hiroe Yanahara, Hiroko Kitajima, Masae Miwa, A causal model on assertiveness, stress coping, and workplace environment: Factors affecting novice nurses' burnout, Vol 9, Nursing Open, 2021.

【学会発表】

- 1) 青山美紀子、勝野とわ子、森田牧子、出貝裕子:若年認知症家族配偶者が抱く社会的孤立感と秘匿感情, 第40回日本看護科学学会学術集会, 2020年12月, 東京(オンライン).
- 2) 木内千晶、高山裕子、松尾まき:高齢者看護に携わる看護職のワーク・エンゲイジメントと心身の健康の因果モデル, 第40回日本看護科学学会学術集会, 2020年12月, 東京(オンライン)
- 3) 齋藤史枝、金谷優輝、木内千晶、勝野とわ子、:老年看護学実習におけるフィジカルアセスメント実施の実態, 第40回日本看護科学学会学術集会, 2020年12月, 東京(オンライン).
- 4) 金谷優輝、勝野とわ子、木内千晶、齋藤史枝:ヘルスアセスメント教育の老年看護学実習における学習効果の検討, 第40回日本看護科学学会学術集会, 2020年12月, 東京(オンライン).
- 5) 青柳美樹、木内千晶、金谷優輝、石田知世、勝野とわ子、福島道子:寒冷地域における筋量、筋力の季節変化—高齢者を対象とした2年間のパイロットスタディ その1—, 第40回日本看護科学学会学術集会, 2020年12月, 東京(オンライン).
- 6) 石田知世、青柳美樹、木内千晶、金谷優輝、勝野とわ子、福島道子:寒冷地域における身体活動量、食生活の季節変化—高齢者を対象とした2年間のパイロットスタディ その2—, 第40回日本看護科学学会学術集会, 2020年12月, 東京(オンライン).

以上

2020 年度 母性看護学領域活動報告

1. 領域構成

江守陽子（教授）、大谷良子（助教）、佐藤恵（助教）

2. 母性看護学領域における教育に関する内容と評価

担当科目

2020 年度は、1 年次科目の「基礎ゼミナール」（江守）「人間の生涯発達（2 コマ）」（江守）、母性看護学領域に関する科目としては、2 年次科目の「母性看護学概論」（江守）、「母性看護援助論」（江守・大谷・佐藤恵）、「看護過程論」（大谷・佐藤恵）を担当した。また、3 年次学生対象としては「母性看護技術論」（江守・大谷・佐藤恵）、「母性看護学実習」（江守・大谷・佐藤恵）、「セクシャルヘルス・アセスメント（選択科目）」（江守）を開講した。さらに、4 年次学生対象としては「総合実習（母性看護学領域）（学生 8 名）」（江守・大谷・佐藤恵）、「卒業研究ゼミナール（学生 7 名）」（江守・大谷・佐藤恵）を開講した。教育に関する学生からの授業評価は概ね「よくわかった」、「丁寧に説明してくれる」、「授業の工夫が楽しい」、「面白い」等々好意的、肯定的であるが、期末試験の成績は必ずしも良いとは言えず、2 桁に上る学生が再試験を受けなければならない状況にある。成績の良くなかった学生には試験後に面接を行い、自己学習すべき単元（項目）を具体的に提示して両者で確認し、自己学習を促している。

一方、1 年生のアドバイザーとして看護専門基礎科目の学修や学生生活を大谷が、2 年生のアドバイザーとして佐藤恵と 3 年生のキャリアアドバイザーとして江守が、課題の多い学生の学修と学生生活について相談を受けるとともに状況把握に努めている。

また、今年度をもって全学年の学生がそろい、全科目が開講された。4 年生は本学初の看護師国家試験を受験することになり、江守は国試対策としての母性看護学関連の特別講義を行った（2 コマ）。佐藤恵は国試対策委員として、各回の模擬試験の監督や全学生の模試の成績一覧表を作成し、データの集積に努めた。母性看護学領域で卒業研究ゼミナールを受講した学生には、模試の成績が明らかになった都度、相談に乗ったり勉強の仕方をアドバイスしたりした。4 月年度当初では国試合格が危ぶまれた学生が多かったが、最終的に 1 名を除き合格となった（予定）。

母性看護学領域の教員は 3 名であり、1～4 年の母性看護学領域の全ての必修科目と、その他の基礎科目、統合科目の必修科目や選択科目を担当することとなり、効率よくしかも学生が興味を持って自らすすんで学ぶ意欲を高められるような授業を工夫し、かつ臨地での臨床教育にも重点を置き提供している。次年度からは大学院教育も始まることとなり、さらなる効率的な時間配分、教科の工夫等が求められることと思われる。

3. 母性看護学領域における研究に関する内容と評価

大谷と佐藤恵はそれぞれが、2019 年度科研費助成事業の若手研究に採択された研究を本年度も継続している。今年度は、covid-19 の影響によりデータ収集が思うように進まず、計画遂行計画の変更が必要となった。

江守と大谷がともに参加する学内プロジェクト研究：「看護学生の職業的アイデンティ

ティと地元志向に関する研究」では、共同研究者である遠藤と大谷自身が研究論文をまとめ、北日本看護学会に2本の論文が採択された。また、佐藤恵が参加する学内プロジェクト研究：「ケア・スピリット」では、2本の学会発表を行った。

学内プロジェクト研究については、さらなる研究の継続と進展を目指すことが確認されている。

さらに、佐藤恵、大谷、江守の3名で行っている学内共同研究：「新型コロナウイルス流行開始時の産科医療施設の妊婦管理および対応の実態」についての研究成果を、佐藤恵が2021年3月に第35回日本助産学会学術集会(Web学会)においてポスター発表を行った。

次年度以降も母性看護学領域として、教育・研究活動をますます発展・充実させる必要がある。

以下論文等

【著書】

なし

【論文】

1) 大谷良子，作間弘美，江守陽子，遠藤芳子，青柳美樹，佐藤つかさ，竹本由香里：岩手県内の医療機関で働く20代看護職者の職業的アイデンティティと地元志向に関する調査，北日本看護学会誌，23(2)，27-36, 2021.

2) 川野亜津子，江守陽子：幼児を育てる母親の主観的幸福感と育児ストレスおよび精神健康度との関連、母性衛生，61(4)，596-604，2020.

3) 遠藤芳子，竹本由香里，佐藤つかさ，青柳美樹，大谷良子，作間弘美，江守陽子：岩手県内で就業している看護職者の地元就職した理由の調査，北日本看護学会誌，23(1)，1-8，2020.

【学会発表】

1) 佐藤恵，大谷良子，江守陽子：新型コロナウイルス感染症パンデミック時の岩手県内産科医療施設における感染症対策および妊産婦ケアの実態，第35回日本助産学会学術集会(Web学会)，2021年3月，神戸市.

2) 青柳美樹，大谷良子，作間弘美，江守陽子，遠藤芳子，竹本由香里：看護学生の職業的アイデンティティと地元志向の3年間の変化，第23回北日本看護学会学術集会(Web学会)，2020年10-11月，秋田市.

3) 作間弘美，大谷良子，江守陽子，遠藤芳子，青柳美樹，佐藤つかさ，竹本由香里：看護学生がロールモデルを持つ効果に関する調査 - 職業的アイデンティティ・地元志向・実習達成感との関連 - ，第23回北日本看護学会学術集会(Web学会)，2020年10-11月，秋田市.

4) 添田咲美，石井真紀子，菊池和子，成田真理子，佐藤恵，濱中喜代：看護学部2年生の「ケア・スピリット」の認識—質的データの分析から—，日本看護学教育学会第30回学

術集会(Web学会), 2020

- 5) 成田真理子, 佐藤恵, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代: 看護学生の3年間の「ケア・スピリット」の認識の変化—量的データの分析から—, 日本看護学教育学会第30回学術集会(Web学会), 2020

以上

2020年度 小児看護学領域活動報告

1. 領域構成

濱中喜代（教授）、遠藤芳子（教授）、下野純平（講師）

甲斐恭子（助教）、遠藤麻子（助手）

2. 小児看護学領域における教育に関する内容と評価

2020年度は、「基礎ゼミナール」を遠藤教授が科目責任者として担当し、濱中・遠藤の両教授と下野講師がGWを担当した。1年生の学修態度や意欲及び到達レベルの確認に役立ったと考える。関連科目として、「人間の生涯発達」を濱中教授が科目責任者として担当した。例年同様、小児の発達段階、発達理論、各期の特徴について概説できた。その学びを踏まえて2年前期の「小児看護学概論」を展開した。他に「看護倫理」を担当した。後期の「家族看護論」では科目責任者として家族看護の基本について教授した。同じく後期には遠藤教授が科目責任者である「小児看護援助論」を下野講師とともに講義および演習を担当し小児における特徴的な支援方法について教授した。3年前期の「小児看護技術論」では実習前に必要な技術について、濱中教授を科目責任者として演習を中心にメンバー全員で展開した。「小児看護学実習」に関しては、昨年同様に2つの保育園と2つの県立病院で行った。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大で、中央病院の実習が中止となり、2Gにおいて学内実習になり、本宮保育園において午前中実習に変更になったが、他は臨地で行うことができ、概ね目標達成ができた。また初めての「総合実習」においても、病院、クリニックとも到達度の高い実習ができた。濱中教授は4年後期の「臨床倫理」を担当し、GW課題学習を中心に展開し成果を得た。

3. 小児看護学領域における研究に関する内容と評価

濱中教授は本学、清水哲郎教授代表の科研の分担研究者として継続し、本学の看護倫理教育に関して検討を重ねた。また第30回日本看護学教育学会学術集会を学術集会長としてオンラインで開催し、好評のうちに終えることができた。研究論文投稿はできなかったが、学会発表は数編行うことができた。

遠藤教授は、第30回日本看護学教育学会学術集会の副事務局長として学術集会長の補佐を行った。また、令和2年度科学研究費補助金（2020年度～2022年度（R2年度4/1～R4年度まで）の学術研究助成基金助成金（基盤研究C（一般））「高度実践に基づく『子供の意志決定能力』の構造分析と評価方法の開発」（研究者代表：山形大学 佐藤幸子教授）の共同研究者として参画している。今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、活動の制限があったが、今後、小児専門看護師のインタビューを開始するにあたり準備を進めている。

下野講師は科学研究費助成事業における、若手研究(B)「脳性麻痺発症のリスクが高い早産児の両親の父親役割遂行に向けた調整を支える看護援助」の研究成果報告書を作成・提

出した。また、その研究の一部を日本小児看護学会誌に投稿し、掲載された。

そのほかに、メンバーが本学の2つのプロジェクト研究を担当し、データ分析等に取り組んでおり、濱中教授は、「看護学生のケア・スピリットの認識に関する研究」(石井筆頭)の一部を日本看護学教育学会にて2編発表した。

遠藤教授は、「学生が地域志向性を持てるアイデンティティ形成のための教育方略に関する研究」(竹本→途中より江守筆頭)では、令和元年度学会で発表した2編の研究を北日本学会誌に投稿し、研究報告として掲載された。さらに令和2年度オンライン開催された第23回北日本看護学会学術集会において2編発表した。

総括として今年度は共同研究・科学研究費を中心に研究活動を推進できた。論文としての発表もできており、次年度以降もさらに向上的に取り組んでいきたい。

以下論文等

【論文】(全部査読あり)

- 1) 下野純平：脳性麻痺発症のリスクが高い早産児の父親が親役割を遂行できるように支援する看護職の行動指標と妥当性の検討－父親役割遂行に向けた両親での調整過程に着目して－. 日本小児看護学会誌, 29, 150-158. 2020.
- 2) 遠藤芳子, 竹本由香里, 佐藤つかさ, 青柳美樹, 大谷良子, 作間弘美, 江守陽子：岩手県内で就業している看護職者の地元就職した理由の調査－看護学生を地元就業に繋げるために－. 北日本看護学会誌, 第23巻1号 pp1-8 2020. 9.
- 3) 大谷良子, 作間弘美, 江守陽子, 遠藤芳子, 青柳美樹, 佐藤つかさ, 竹本由香里：岩手県内の医療機関で働く20歳代看護職者の職業的アイデンティティと地元志向に関する調査. 北日本看護学会誌, 第23巻2号 pp27-36 2021.2

【学会発表】(全部査読あり)

- 1) 添田咲美, 石井真紀子, 菊池和子, 成田真理子, 佐藤恵, 濱中喜代：看護学部2年生の「ケア・スピリット」の認識－質的データの分析から－第30回日本看護学教育学会学術集会講演集 p135 2020
- 2) 成田真理子, 佐藤恵, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代：看護学部3年間の「ケアスピリット」の認識の変化－量的データの分析から－第30回日本看護学教育学会学術集会講演集 p136 2020
- 3) 青柳美樹, 大谷良子, 作間弘美, 江守陽子, 遠藤芳子, 竹本由香里：看護学生の職業的アイデンティティと地元志向の3年間の変化. 第23回北日本看護学会学術集会 p 32 2020
- 4) 作間弘美, 大谷良子, 江守陽子, 遠藤芳子, 青柳美樹, 佐藤つかさ, 竹本由香里：看護学生がロールモデルを持つ効果に関する調査－職業的アイデンティティ・地元志向・実習達成感との関連－. 第23回北日本看護学会学術集会 p 38 2020 以上

2020年度 精神看護学領域活動報告

1. 領域構成

岡田実（教授）、長南幸恵（講師）、佐藤つかさ（助手）

2. 精神看護学領域における教育に関する内容と評価

本年度が完成年度に当たるため、精神看護学領域に関連する全ての科目（精神看護学概論、精神看護援助論、精神看護技術論、精神看護学実習、総合実習、看護研究ゼミナール）が実施されたことになる。

概ね予定通り実施されたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、総合実習については精神看護学分野に配属された4年生全員が希望施設において実施できた。領域別実習の3年生は学生への学習機会の平等性からこれまでの2週間の病院実習を1週間の病院実習と1週間の学内実習の合計2週間のスケジュールに変更し、実習施設からの許諾を得て、実習に臨んだ。しかし、一部2クール目も実習できた施設もあったが、概ね1クール目のみの実習施設での実習となり、残りを全て学内実習に切り替えざるを得なくなった。

今年度は専門領域の看護過程の展開をゴードンから Bio-Psycho-Social（生物・心理・社会）+Life（生活）に切り替え、専門職としての“気づき”に基づき、その場で気づいた情報・現象をエクセルに入力・定義し、ある程度の情報を入力した後にソート機能を用いて効率的に問題群を分類・整理し、看護問題をラベルする方式を採用した。臨床現場に繋がるアセスメント方式として採用したが、iPadのアプリケーションではワードやエクセルへの互換が十分でなく、Microsoft社製ソフトの制限版が辛うじて使える程度であるため、十分な活用ができないことが明らかとなった。Microsoft社製のsurfaceシリーズのPCであれば互換性や携帯性に問題がなく、看護過程をデータベースで運用する可能性は残されている。今後、実習場所によってはペーパーBaseの看護過程を運用することを余儀なくされることもあるが、看護過程に発揮されている看護師の認知プロセスを活用した運用が重要であること、また大学で行われている教育用の看護過程展開方式では、臨床現場においては役立てることができないという問題の解決を引き続き検討する必要がある。

今年度は分野では新たに総合実習（6名）を企画・実施した。6名共に実習目的を具体的にし、学生が作成した実習計画書を携えて実習施設の臨床実習指導者（場合によっては実習病棟の師長）に提示しながら説明を行った。焦点が絞られた実習だったので専門領域実習では得られなかった経験と情報を得ることができ、実習生の満足度も高かった。来年度においても総合実習の方法は準用可能である。

3. 精神看護学領域における研究に関する内容と評価

精神看護学領域では、個々人の専門性の確立を目指している。現在、分野として学内共同研究に取り組んでいる。「岩手県沿岸部にある医療機関と看護系大学の新たな連携の構築—ICTを活用した看護支援プログラムのニーズ調査」が2020年6月1日に採択（183,800円）され、同年12月22日に岩手保健医療大学研究倫理審査において承認され、ニーズ調査を実施し、その調査結果を学内共同研究報告会で発表した。コロナ禍にあつて沿岸部の医療機関では、院外への教育研修、院外からの講師の招聘など、移動を伴う教育研修の機

会が昨年度実績に比べ減少し、院内での教育研修や e-learning による研修が増加していることが分かった。また、新人教育研修など従来院内で企画実施していた教育研修の機会に変化は見られなかった。

大学から提供して欲しい支援プログラムの意向調査では、看護研究支援の要望が最も多く、今回の調査施設から 1 施設が看護研究支援プログラムに名乗りがあった。新年度 4 月から支援を開始するために、2021 年度の学内共同研究に課題をエントリーする予定である。

以下論文等

【論文】

- 1) 岡田実：日精協が提案する「精神科医療安全士」や CVPPP は精神科臨床における暴力の未然防止に効果は期待できない、精神医療、第 98 巻、102-108 頁、2020.
- 2) 岡田実：認知症の人による暴力・暴言の理解と対処、認知症ケア、夏号、71-77 頁、2020.
- 3) 長南幸恵：総説：ASD のある子どもの感覚刺激への応答－集団生活での行動観察から、行動科学、59(2)、1-10 頁、2021.

【学会発表】

- 1) 長南幸恵：招聘シンポジスト「ASD のある子どもの感覚特性と応答」、日本心理学会第 84 回大会（WEB 開催）大会企画 8 自閉スペクトラム障害と感覚異常：動物実験による神経科学・行動科学の知見から、乳幼児、児童を対象とした行動科学・認知科学までの知見を振り返る、2020.9.8-11.2、2020.東京都（東洋大学開催）
- 2) 岡田実、佐藤つかさ、長南幸恵：岩手県沿岸部にある医療機関と看護系大学の新たな連携の構築－ICT を活用した看護支援プログラムのニーズ調査、2020 年度岩手保健医療大学学内研究報告会（2021 年 3 月 11 日）

以上

2020年度 地域看護学領域活動報告

1. 領域構成

福島道子（教授）、青柳美樹（講師）、石田知世（助手）

2. 地域看護学領域における教育に関する内容と評価

1) 領域教員が担当した授業科目

領域教員が担当した授業科目は下記の通りであり、生活や環境、法制度と関連づけて健康を考えること、それらを基盤とした看護のあり方に焦点化して授業を展開した。

【3年生】

「ヘルスプロモーション論」は3年生前期に開講し、青柳・福島が担当した。本科目のねらいは、WHO が提唱するヘルスプロモーションの理解と、わが国のヘルスプロモーションに関連する法制度と地域看護活動を理解することであった。授業の目標は概ね達成できた。学生の授業評価では「難しかった」等の意見も得ているため、次年度は学生の評価に応えるべく工夫していきたい。

「地域看護学概論」は3年生後期に開講し、福島・青柳が担当した。本科目のねらいは、後に続く地域看護学および公衆衛生看護学に関連する科目の基礎をつくることであった。授業の目標は概ね達成できた。学生の授業評価では、「地域看護の視点の重要性を理解した」等の意見が寄せられた。

「地域看護援助論」は3年後期に開講し、福島・青柳が担当した。本科目のねらいは、地域看護のいわゆる「技術」といわれる家庭訪問、健康診査、健康相談、健康教育、グループ・組織化、地域アセスメントについて、地域看護実践に引きつけて理解することであった。演習時間の不足等の限界はあったが、目標は概ね達成できた。学生の授業評価では、「小テストが役立った」との意見があった。

「保健医療福祉連携論」は在宅看護学関連の科目であり、3年後期に開講、福島・相澤が担当した。本科目のねらいは、在宅看護を展開するにあたって必須である多職種・多機関が連携して活動することについて、その意義、連携の要素・構造、連携の方法等について理解することであった。グループワークによる学修も取り入れ、目標は概ね達成できた。

【4年生】

「保健医療福祉行政論」は4年前期の科目であり、青柳・福島と非常勤講師である瀧澤教授が担当した。新型コロナウイルス感染拡大のため、瀧澤教授の授業は対面授業、課題授業、オンライン授業となった。本科目のねらいは、保健医療福祉の制度・法令を看護活動と結びつけながら理解することであった。知識として蓄積していくことが求められるため、学生は難儀している様子がみられたが、最終的には目標は概ね達成できた。

「国際看護論」は4年後期の科目であり、青柳と非常勤講師である友松教授が担当した。本科目のねらいは、グローバルヘルス、異文化・多文化を理解し、それらを背景として看護を考察することであった。SDGs と看護、トランプを活用した異文化体験、低所得地域に対する支援計画づくり、映画の一場面や You Tube における所得格差、障がい者文化の変遷等の講義やグループワークを通し、学生自身の文化的特徴や異文化との共生について考えを深めることができていた。

【保健師課程】

「公衆衛生看護技術論」は保健師課程前期の科目であり、福島・青柳が担当した。本科目のねらいは、保健師教育でいうところの「活動展開論」であり、ライフステージ別と課題別に公衆衛生看護活動の展開を学ぶことであった。60時間の科目であるが、実習につながる演習時間が十分に確保できなかった観がある。また、時間割がタイトであり、前期が始まる前の3月から授業を開始した。

「公衆衛生看護管理論」は保健師課程前期の科目であり、福島・青柳が担当した。本科目のねらいは、地域アセスメントを含む公衆衛生看護管理の目的と機能、方法を学ぶことであった。この科目においても特に地域アセスメントの演習時間の確保に苦慮したが、目標は概ね達成できた。

以上の授業展開については、実習期間との関係から時間割がタイトとなり、かつ、科目展開の順序性にも問題が生じた。このことは、学生の授業評価においても指摘されており、次年度は可能な限り改善を目指したい。

2) 地域看護学実習

地域看護学実習(4年生・必修)は、実習施設の確保ができなかったため学内演習形式とした。学生をグループ編成し、盛岡市や釜石市等の具体的地域を与え、地域保健の観点から地域アセスメントを行った。当初は1日間の地区踏査を予定していたが、新型コロナウイルス拡大のため断念した。また、地域アセスメントの結果発表とともに地域アセスメントの必要性についてディスカッションし、地域アセスメントの具体的方法を理解するとともに、地域アセスメントが地域看護の要であることを理解したようである。

3) 公衆衛生看護学実習

公衆衛生看護学実習(4年生・選択)は、①保健所・市町村(公衆衛生看護)、②学校(学校看護)、③事業所(産業保健)で構成されている。

①保健所・市町村の実習は、国の緊急事態宣言が発せられ、実習地の保健事業がほとんど中止になったことや学生の安全確保の観点から学内演習型とした。学内演習では、極力実習体験と近づけるため視聴覚教材を多用した。また、公衆衛生看護の役割・機能等を考察するためディスカッションの時間を多く設定した。結果、現場の体験は削がれたものの、考察、探求といった思考力を磨く機会となり、学生からの評価の中にも「書ききれないほど得たものが多かった」と書いた者がいた。②の学校での実習は、市内10カ所の小学校において、養護教諭の指導のもと新鮮な体験をした。③事業所での実習は、県内3カ所の事業所に出向き、労働者の健康管理について学んだ。

なお、保健所・市町村の実習は実習可能地域が必ずしも多くなく、県内3大学(岩手県立大学・岩手医大・本学)が連携して公平な配置とならなければならない。また、保健所・市町村の側から、県内実習の全体がみえないとの意見もあった。そこで、1月6日、3大学による実習打ち合わせ会議を開いた。結果、2021年度実習には大きな重複はみられないこと、3大学実習一覧表を作成して県内保健所と医療政策室に送ることとなった。

4) 総合実習

地域看護学領域の総合実習は、滝沢市、久慈市、葛巻町で6名の保健師課程の学生が実習した。本来であれば、総合実習は公衆衛生看護学実習を基盤にして、自らの課題をみつ

けそれを実習展開するのであるが、公衆衛生看護学実習が学内演習型となったため、現場の指導者に対しては公衆衛生看護学実習として指導していただくよう依頼した。結果、学生は意欲的に取り組み、実習目標は概ね達成された。

5) 他領域の臨地実習

「早期体験実習」では青柳・石田、療養援助実習Ⅱでは青柳・石田、生活援助実習では青柳・石田が担当した。各々の実習において、目標達成のため学生支援、学修環境の調整に努めた。

6) 保健師課程履修生の選抜

4月に保健師課程履修者審査委員会を立ち上げ、ここに福島(委員長)・青柳・石田が加わった。委員会は3回開催され、その過程で選抜に至るスケジュール、選考基準、試験内容、申請書、問題作成依頼、判定案等を作成した。選抜試験は、10月10日(土)に実施し、結果は審査委員会、教学委員会を経て、11月18日(水)の教授会で決定された。選抜された履修生は20名であった。その後、履修生に対し、1月7日(木)に保健師課程履修者オリエンテーションを実施し、学部長挨拶の後、課程のカリキュラム、実習、国家試験等の概要を伝えた。

3. 地域看護学領域における研究に関する内容と評価

青柳・福島・石田は学内共同研究「積雪寒冷地域における身体活動量、食生活、筋力、骨格筋量の季節変化」(代表:青柳美樹)に加わり、積雪寒冷地域であるX市の高齢者を対象に研究を進めた。結果は2報に分け、11月18日の学内研究発表会と第40回日本看護科学学会学術集会にて発表した。領域として行った研究は当年度はなく、次年度以降はテーマを掲げて取り組みたい。

以下論文等

【著書】

- 1) 岡庭豊, 中島茂, 福島道子, 他: 看護師・看護学生のためのレビューブック 2021, メデックメディア, 2020

【論文】

- 1) 遠藤芳子, 竹本由香里, 佐藤つかさ, 青柳美樹, 他: 岩手県内で就業している看護職者の地元就職した理由の調査 看護学生を地元就業に繋げるために、北日本看護学会誌、23(1), 1-8, 2020
- 2) 青柳美樹, 高山裕子, 多賀昌江: 夫の海外赴任に同行する妻の現地相談相手、社会参加の滞在期間別2年間の比較 2016年と2017年のWeb縦断調査から、日本産業看護学会誌、7(1), 9-16, 2020
- 3) 鎌田加容子, 福島道子: 訪問看護ステーション管理者の職務継続の状況、日本看護医療学会誌、22(1), 38-46, 2020

【学会発表】

- 1) 青柳美樹, 大谷良子, 作間弘美, 他: 看護学生の職業的アイデンティティと地元志向の3年間の変化、第23回北日本看護学会学術集会(Web学会)、2020, 11.31、12.

- 2) 青柳美樹, 石田知世, 木内千晶, 金谷優輝, 勝野とわ子, 福島道子: 寒冷地域における筋量、筋力の季節変化—高齢者を対象とした2年間のパイロットスタディ その1、第40回日本看護科学学会学術集会(Web学会)、2020, 12, 12~13
- 2) 石田知世, 青柳美樹, 木内千晶, 金谷優輝, 勝野とわ子, 福島道子: 寒冷地域における食生活、身体活動量の季節変化—高齢者を対象とした2年間のパイロットスタディ その2、第40回日本看護科学学会学術集会(Web学会)、2020, 12, 12~13

以上

2020 年度 在宅看護学領域活動報告

1. 領域構成

大越扶貴（教授）、加藤美幸（助手）、工藤美由紀（助手）

2. 在宅看護学領域における教育に関する内容と評価

2020 年度は、3 年次科目の在宅看護学概論（大越）、災害援助論（大越）、在宅看護援助論（大越）、エンドオブライフケア論（2 コマ：大越）を担当した。また、大越は、3 年生のキャリアアドバイザーとして学生生活や就職活動について他 2 名のアドバイザーとともに支援した。加藤・工藤は、生活援助実習（1 年）、療養援助実習Ⅱ（2 年）を担当した。

4 年次科目では、災害看護論（2 コマ：大越科目責任者）、領域実習（COVID-19 の感染拡大に伴い 5 クールは学内演習、2 クールは訪問看護ステーション（ST）の実習：大越、加藤、工藤）、総合実習 4 名（大越、加藤、工藤）、卒業研究 3 名（大越）を担当した。

在宅看護・災害看護に関わる科目では、講義中に講義内容を理解するための幾つかの発問をし、その問いに対する回答を記述させ、次の講義でフィードバックすることを重ね講義内容に対する理解促進を図った。また、災害看護論では、災害弱者をテーマに、岩手県国際交流協会の協力を得て在住外国人の災害時支援について演習を実施した。オムニバス型のエンドオブライフケア論は、前年度の課題であった授業全体としての目的や系統的な論理の組み立てに関して十分な議論ができなかったため、引き続き担当教員間の目的の共有などを図り授業の改善を図りたい。

在宅看護実習は、COVID-19 の感染拡大により、学内と ST 実習という 2 パターンとなった。そのため学びの不均衡が生じないよう、学内では ST 実習内容に準じたプログラムの工夫や訪問看護ステーションおよび地域包括支援センターの看護職をゲストに迎えるなどの努力を図った。

3. 在宅看護学領域における研究に関する内容と評価

大越の実績として科学研究費助成事業基盤（C）「高齢者虐待対応における息子・娘介護者の続柄や性差を考慮した支援・介入技術の開発」（最終年度）の主研究者として、息子・娘介護者のインタビュー調査結果に基づき、日本公衆衛生学会総会でオンラインによる発表を行った。また研究で得られた一部の結果については、福井県や三重県から依頼された地域包括支援センター専門職研修（オンライン）においてフィードバックを行った。COVID-19 下の制限があり、研究が進まず最終年度ではあるが延長申請をすることとなった。分担研究では科学研究費助成基盤（C）「在宅生活ニーズの把握と多職種連携のための見取り図の活用効果の具体的検証」（1 年目）の分担研究者としてオンライン会議に参加し次年度の計画立案を行った。

加藤・工藤は、科学研究助成事業基盤（C）の公募予定だったが準備が整わなかった。そのため文献検討等、研究計画のブラッシュアップを図った。

以下論文等

【論文】

- 1) 森本裕也, 清水真由美, 中北裕子, 谷出早由美, 大越扶貴: 外国出生結核患者の地域DOTSにおいて保健師が抱える困難, 三重県立看護大学紀要, 第25巻 2020.

【学会発表】

- 1) 大越扶貴, 表志津子: 母親を介護する息子・娘介護者の介護と仕事の両立過程に生じる困難とその対処, 第79回日本公衆衛生学会総会, 2020年10月, 京都(オンライン).

以上

外部資金獲得状況

外部資金獲得状況一覧

清水哲郎 (一般教養：教授)

1) 基盤研究(A)(代表)

課題番号：18H03572

研究課題名：臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組み込み

濱中喜代 (小児看護学：教授)

1) 基盤研究(A)(分担)

課題番号：18H03572

研究課題名：臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組み込み

遠藤芳子 (小児看護学：教授)

1) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：20K10826

研究課題名：高度実践に基づく「子供の意思決定能力」の構造分析と評価方法の開発

勝野とわ子 (老年看護学：教授)

1) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：19K10991

研究課題名：若年認知症家族介護者の健康問題の「見える化」による支援システムの構築

2) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：20K10918

研究課題名：若年認知症家族介護者の経験している「慢性的悲嘆」と健康に関する研究

大越扶貴 (在宅看護学：教授)

1) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：20K11030

研究課題名：在宅生活ニーズの把握と多種連携のための見取り図の活用効果の具体的
検証

2) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：18K10577

研究課題名：高齢者虐待対応における息子・娘介護者の続柄や性差を考慮した支援・
介入技術の開発

木内千晶 (老年看護学：准教授)

1) 若手研究(代表)

課題番号：18K17616

研究課題名：高齢者施設の看護職のワーク・エンゲイジメント因果モデルの検証

大井慈郎 (一般教養：特任講師)

1) 若手研究(B)(代表)

課題番号：17K13838

研究課題名：東南アジア都市における工業団地労働者の地域・階層移動研究

青柳美樹 (地域看護学：講師)

1) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：19K11200

課題研究名：渡航看護のコンピテンシー・モデルの開発と渡航看護認識向上プログラ
ムの検討

長南幸恵 (精神看護学：講師)

1) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：16K12158

研究課題名：ASD 児の各感覚の特性と生活の困難さに関する研究

相澤出 (一般教養：講師)

1) 基盤研究(A)(分担)

課題番号：18H03572

研究課題名：臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組み込み

大谷良子 (母性看護学：助教)

1) 若手研究(代表)

課題番号：19K19685

研究課題名：体外受精により妊娠した女性の妊娠・出産体験のとらえ方に関する研究

佐藤恵 (母性看護学：助教)

1) 若手研究(代表)

課題番号：19K19650

研究課題名：分娩様式を問わない出産体験評価尺度の実用化にむけた検討

石田知世 (地域看護学：助手)

1) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：19K11200

課題研究名：渡航看護のコンピテンシー・モデルの開発と渡航看護認識向上プログラムの検討

以上